

フィービの遺産



“Phoebe”

(1884)

かわいそうなフィービ！　今日は大晦日だが、過去を回想してみても、未来を見通してみても、彼女の慰めになるようなものはほとんど何もない。現在の状況についても楽しくなることなど何もない。それゆえ、彼女はあれこれと思索し、考えが散漫になって、過ぎ去ったことで気が重くなり、冷酷でむごい今の時代に余儀なくされるどん底生活と向き合わざるをえなかった——追いつめられた動物のように、どうしようもない恐怖におののきながら。暖炉の火床には熱がほんの少し残っていたが、石炭はもうない。戸棚には明日の朝食用にパンが一切れあったが、それを食べてしまったら、新しいパンを買うためのお金はもうどこにもない。食欲がある大人の場合、お腹がグーッと鳴るのはそれ自体消費されるエネルギーを欲している証拠であるが、十六歳にもならない少女の場合、これは本当に辛いことである。フィービは長期間に及ぶ食料不足で体が衰弱し、暮らし向きが一番よい時でもひどい人見知りだったのに、慰めや助けが必要な今は頼れる人が全くおらず、世間のみならず自分自身でさえ怖くなることがあった。従って、彼女が長いこと座ったまま、その美しい目で小さな斑点のような赤みがあった一つの石炭を見つめていたとしても、何ら不思議なことではない。こんな石炭では雨もりがする屋根裏部屋の湿気や寒さに対抗しようとしても相手にならない。それは彼女自身が四方八方から悩まされている非常に恐ろしい、知られざる闇の権力——我々が無頓着にも「社会的勢力」と呼んでいるもの——との闘争で、ほとんど相手にならないのと同じである。とはいえ、フィービは涙を流して泣いたりしなかった。そんなことをしても無益で、滑稽なだけだと思ってい

たのだろう。実は、金銭的な苦勞が始まった数週間前に、彼女は思う存分に泣いていた。しかし、今はもう彼女は両目をかっと思開いて、想像を絶するくらい額にシワを寄せている。時たま、空腹という肉体的な苦しみを数分ほど忘れてしまうくらいに、思考が散漫になつて交錯することもあつたが、そんな時は決まつて突然、ゾクッと寒氣を感じて我に返つたものである。窓枠がゆるんでガタガタ音を立て、ドアの下の間隙や板張りの節穴を通して、針で刺すような寒風がヒューッと吹き上げてくるのだ。足はすでにかじかんでおり、手を温めるには自分の胸に差し込んでおくしかなかった。

この部屋にはフィード以外にも生氣を——活氣さえも——感じさせるものが存在していたが、それは氣分が落ち込んだ彼女に別の悲しみを思い出させた。彼女の目の前にある炉棚の上には、せめて心だけでも暖めるためだろうか、小さな木製の鳥かごが置かれており、その中には濃茶色のカナリア⁽¹⁾が入っていた。かつては姉さんの鳥だった。姉さんはフィードにとつては母親代わり、いや、彼女が記憶している唯一の母親であつた。そういうことであれば、姉さんは父親代わりでもあつた。というのも、娘たちにとつて実の父親は昔からずっと出鱈目な年金受給者だったし、年金の使用時期も使用方法もデタラメだったが、彼女たちの寛大さに付け込む手口に至つてはデタラメどころではなかった。それで、實際、父親のしつこい要求に対して堪忍袋の緒が切れる日がやつて来た。二人の娘は父親のもとから逃げ出し、自分たちだけで新たな家庭を築いたわけだが、それによって少なくとも自分たちの稼ぎを自分たちで使い、誰

にも悩まされずに暮らせるようになった。しかし、こうして自由になった最初の年の夏、がんばり屋の立派な姉さんが突如として病気になる、妹を守ってやれる日数も限られるようになった。結局、姉さんは亡くなってしまい、教区によって手厚く埋葬された。フィービは姉さんの墓がどこにあるか知っていたが、そこはできるだけ多くの貧民の亡骸を一緒に押し込んだ掘割のような墓だったので、そんな場所に行つて涙を流しても、苦しみが和らぐどころか増すだけである。一方、小さな褐色のカナリアはまだ生き延びていた。去年の春の楽しかった頃に購入されたものだが、この鳥と同じように無邪気ながらもオドオドした哀れなフィービが飼い続け、熱心に世話をしていたのだ。このオス鳥は姉妹の間では「ピーちゃん」と呼ばれていた。現在の飼主の日々のパンが質量ともに不十分であっても、ピーちゃんはまだ好きなだけエサの種をもらっている。今晚もまた、寒さや不安をもとめせず、二本の止まり木の間を絶え間なくピョンピョン跳んだり、食欲を増すためであるかのようにクチバシを研いで、自分の名前に負けてなるものかと、時刻も気にせず何度も嬉しそうにピーピー鳴いている。

フィービの姉さんは造花職人であった。フィービ自身も同じ手芸の徒弟期間を終え、今では「見習い」の地位を得ている。現在の状況がよくなれば、おそらく八シリングの週給を稼げるだろう。そのうち「職人」になって、運がよければ十五シリングになるかもしれない。いやいや、月日が経てば、いずれ「女監督」になって——その場合は確実に週給二五シリングぐらいもらえるが——健康さえ崩さなければ、当然ながら、かなりの高齢になるまでは救貧院⁽²⁾の

世話にならずにすむだろう。もちろん結婚もできるはずだ。とても優しくて器量よしだから、多分、結婚できる可能性もかなりあるだろうが、それは今のところまだ彼女の将来の希望の一つになつてはいない。現在、彼女が考えているのは、正直に働いて週に八シリングを稼ぎ、それで生活する機会を得ることだけだった。とはいえ、彼女は他の女たちと違って、「生活する」という言葉に「お金を稼ぐ」以外の意味があるなんて考えたこともなかった。残念ながら、意志と道に関する格言⁽³⁾は彼女の場合には当てはまらないようだ。数週間前に仕事を失ったのは彼女自身の責任ではない。ただ時期が悪かった。こうした問題で支配的な立場にいる権力者たちや首長たちが、社交界では羽根飾りを身に着けるべしという命令を発したため、その影響で造花の需要がほとんどなくなつてしまった。造花職人の大半が住んでいるホクストン⁽⁴⁾の作業場が難儀したのはそのためである。フィービの雇い主は心の優しい人で、最後の最後までがんばってくれ、女の職人たちが何か仕事を見つけてくれと、やつれた真剣な表情で頼みにきた時はいつも、実際には需要のない仕事まで提供してくれ、彼女たちだけのためにシティー⁽⁵⁾までわざわざ足を運び、商売用語を使うならば、造花のたき売り^{スロウター}までしてくれた。しかし、ついに雇い主も彼女たちの哀訴に首を横に振り、「現在の状況が改善されるような時期がまた来るまで落胆しないように」と言うしかなかった。これが皮肉な言葉であることは分かつていたが、もちろん彼に皮肉のつもりはなかった。

さて、フィービもまだなんとか生き続けていた。もっとも、その間ずっと彼女がどうやって

露命をつないでいたか、説明するのはむずかしい。仕事がある時は部屋代として週に三シリング払っていたが、それがなくなつてからは半クラウン⁽⁶⁾ 払うだけでよい今の部屋をなんとか見つけて引越していた。それは彼女にとって結構な部屋だった。袋小路の奥まった端にある下宿屋の屋根裏部屋で、その袋小路へは不潔な裏通りから汚れたアーチの下を通って行かねばならない。わざわざ言う必要もないことだが、その屋根裏部屋の床に敷物はなく、飾りのない壁は石膏^(ちこう)がむき出しており、ガタガタする窓にはブラインドだけでなくカーテンも———とか、フィービが本来は彼女の肩にかかっているべき粗末なショールを窓の下半分にピンで留めていなければ、カーテンも———なかった。ベッドも一応あるにはあった。とはいえ、なんとまあ、もぐり込んだ時の冷たさ、夜中に寒気を感じて目を覚ました時の布団の薄さときたら！ 部屋の角の床にはイスとテーブルと洗面器もある。それから、部屋の隅には作り付けの戸棚があつて、その中にはフィービの一張羅とは別の服がかけてあるはずだったが、現在どこにあるかは彼女のポケットに入っている小さな黄色のカード⁽⁷⁾ が雄弁に語っていた。そうだとすると、この部屋はやはり彼女にとって我が家^{ホーム}であり、これまでのところ部屋代もきちんと払われている。取るに足らない針仕事、ちよつとした戸口の階段掃除、何らかの使い走り、時々頼まれる子供の世話、袋小路に住む人たちが路上で売るために野菜を洗ったり準備したりする時の手伝い———そうしたことで彼女が毎週の部屋代を工面していることは神様しか御存知ないが、今まで部屋代を滞納したことはなかった。しかし、今晚はダッブズ夫人が下の共同の台所

で待つていても、フィードがいつものように姿を見せないの、この大家さんはどうとう自分から支払いを求めて屋根裏部屋まで上がってきた。悲しいかな、フィードに支払いの準備はできていなかった。ダッブズ夫人は決して情け知らずの女ではない。あの青白い、辛抱強い、あどけない顔を見て、その顔が涙の滴で濡れるまで厳しい口調で言い立てるなんて、そんなことのできる女がいるだろうか？ 支払い不履行は今回が初めてだったので、ダッブズ夫人は催促することもせず、腰を下ろして友だちのように話した。主にクワイ氏のことについてであった。

この屋根裏部屋で何分間か過ごせば、クワイ氏とは一体どんな人物か必ず知りたくなるはずだ。そう呼ばれていた御仁は、自分の奇妙な名前があまりに強く頭に焼きついた結果、この名前に取りつかれてしまったようである。字を書くための平面と文房具が近くにある時はいつも、読みやすい筆跡で自分の名前を書かずにおれなかったのかどうか、はたまた、その尋常ならざる名前を自画自賛して、そんなことをしてかしてしまったのかどうか、今もって結論が出ていない。ただ、部屋の石膏壁のありとあらゆる場所から、この奇抜な短い名前が間借り人にならみついているという事実は、今も昔も変わらない。この名前は床の上にも所どころ、いや、天井にも書かれていて、非望を抱く間借り人であればシャンデリアでもぶら下げたいと思う地点が、みごとな円——素描用木炭で書かれた「クワイ」という無数の言葉からなる円——で囲まれていた。クワイ氏とは誰なのか？ フィードはすでに彼のことをよく知っていた。彼

女が最初にやって来た時、すぐさま大家のダップズ夫人が彼の過去について知っていることをすべて話してくれていたからだ。彼はフィービの直前に同じ屋根裏部屋を借りていた人で、その賃貸期間はほとんど三年以上に及んでいた。ダップズ夫人の話によれば、彼は老紳士で、かつては自分の馬車を持つということがどういう意味なのか知っていたそうだ。おそらく、この贅沢を人生で一番必要としていた頃に奪われてしまったことで、「おツムがイカレた」のだろうということであった。彼はいつも生活が窮迫して「赤貧洗うがごとし」だったが、ダップズ夫人が感謝を込めて家賃帳に太字で記していたことから分かるように、いつも部屋代を（そのために食事を抜いたとしても）なんとか払っていた。彼は毎日のように外出し、「便利屋として食い扶持を稼ぐ」ために昼はひねもす出払っていたそうだ。クウィ氏の仕事について、これ以上に詳しい情報は得られなかった。ダップズ夫人からも聞き出せなかったが、おそらく彼女も知っていることはすべて話してくれたのだろう。彼の最期は悲劇的だった。ある晩、彼が姿を現さなかったので、下宿屋のある袋小路は大騒ぎになったという。毎日一定の時刻になると、彼は決まって悪臭を漂わせながら弱った足でやって来たが、その姿を見るのが住人たちの日課の一つになっていた。というわけで、ありとあらゆる方面から質問が投げかけられ、その日の朝、クウィ氏は家を出た一時間後、荷馬車に轢かれて即死したということが判明した。ポケットには三ファージング⁽⁸⁾のお金しかなかったそうで、財産も親戚もなかったので、彼もまた教区によって手厚く埋葬されたという。彼の墓には石碑もなかったため、敬虔なダップズ夫

人は屋根裏部屋の石膏壁に書かれた彼の名前をどうしても消させてくれなかった——実際にどんな種類の清掃もいやがっていた——結果、あとに入居した間借り人がじつと眺めて思いをめぐらすことになった。おそらく、このクワイという名前は特別な教訓を与えるものではないのだろうが、いずれにせよ、ダップズ夫人の口から出る時はいつも、多くの話に尾ひれが付けられた。

* * * * *

人間は一時的に気がめいつて考え込んでしまっても、最後は本能に従って活動を開始するものである。炉格子に残った最後の火が消えるのを半ば夢心地で眺めていたフィードも、すぐに小さな溜息をついて立ち上がり、屋根裏部屋を見まわした。ベッドの上にはすぐに針をせっせと動かす必要のある靴下が一足あつたけれども、手が冷たくて縫い物などではできない。彼女はひとりぼっちでみじめだったが、就寝前に三十分ほど外出してみようとふと思つた。しかし、ひとりぼっちでみじめな人間の習性であろうか、気晴らしになつたかもしれない気分転換に二の足を踏んでしまった。おまけに、夜の街中を歩きまわるのは彼女の習慣ではなく、そうしたことは避けるように姉さんからも注意されていた。やめてしまった理由はもう一つある。散歩に行くには袋小路の入口のすぐそばにある豚肉料理店の前を通らねばならない。今の時刻であれ

ば、アツアツの豆粒ブデイング、豚肉団子^{フアゴット}、乾性腸詰^{サビロイ}、その他のうまいものが香ばしい湯気を立てている。そうした試練は彼女には辛すぎた。彼女はガランとした屋根裏部屋を見渡し、目に入った名前から必然的にクワイ氏のことを考えた。かわいそうなクワイお爺さん！ 間違はなく、お爺さんは何時間も腹を空かせ、この部屋に座って街角の豚肉料理店のことを考えていたはずだが、その憂さ晴らしに壁に自分の名前を書いていたのだろう。だが、何やかや言っても、彼女はクワイ氏よりも暮らし向きがよかった。彼女を慰めたがっている——彼女がひとりぼっちではないことを思い出させてくれる——ピーちゃんという友だちがいるではないか。彼女は鳥籠に向かつて、そこに小さな指を入れてクチバシでつつかせた。ところで、明らかにピーちゃんの鳥籠は掃除をしてやる必要があった。フィービは悩みがいろいろあつて、その務めを数日ほどサボっていたのだ。掃除をすれば、しばらくは気分転換になるだろう。鳥籠の扉を開けると、好奇心の強そうな目をしたピーちゃんが住みかの敷居にしばらく留まっていたから、いつものようにパタパタと飛び出し、ベッドの足もとにある真鍮製の取っ手に留まった。それからフィービの動きに驚いて、今度は大胆不敵にも戸棚の天辺に飛んで行き、そこでじっとしていた。

フィービは小さな鳥籠を掃除し、見た目をよくしてやってからピーちゃんを呼んだが、この主^{あるじ}は戻りたくない様子であった。あんな高い所へ自ら進んで寝に行くなんて、お馬鹿なピーちゃん！ フィービは連れ戻すために自分の背よりもずっと高い戸棚の天辺に向かつて少しジャ

ンブしてみた。悲しいかな、ピーちゃんは飛び降りる代わりに——今までにない天邪鬼ぶりだが——あわてふためいて奥の方へ行つてしまい、見えなくなってしまった。戸棚の木をたいてみたが暖簾のれんに腕押し、呼んでみても同様に効果なしだった。初めてのことだが、イスの上に立つて戸棚の平たい天辺を手探りするしかない。フィービは片手に持ったランプで即座に逃亡者を発見できたが、一番先の隅っこにいたピーちゃんは隠れん坊をして楽しんでいるように見えた。

「キタナイ、キタナイ、ピーちゃん！ まあ、全身ホコリで真っ黒になるわよ！ こっちにいらつしやい、腕白坊やのピーちゃん！ あら、あれは——」

フィービは声が出なかった。分厚いホコリに埋もれながらも、ランプの光を受けてキラキラ輝いているあれは何だろうか？

お金じゃないか！

そうだ、お金だ。間違いない。こんな所に置かれているなんて尋常ではない。半クラウンの銀貨、一シリングの銀貨、六ペンスの銅貨——六ペンス以下の硬貨はない。すべて円錐形に積まれて、しかも一つの単語になるようにきちんと並べられている。その単語とは何か？ 案の定、他ならぬ「クワイ」だった！ 何だ！ 哀れなクワイお爺さんは、とどのつまり、この戸棚の天辺に銀貨を貯め込んでいた守銭奴だったのか！ 家の清掃をあんなにいやがっていたダッブズ夫人はなんていい人だろう！

フィービはイスから降りて、手にランプをまだ持つて立つてまゝ真つすぐ前を見ていたが、何も見えなかった。こうやってどれぐらい長く立っていたか、もし坊やのピーちゃんが突然デームに飽きて——実際に一方的な試合だった——が、炉棚の上に飛び降りて来なかったならば、彼女には分からなかっただろう。ピーちゃんは、そこからピヨンピヨンと鳥籠に戻り、補充したばかりのエサの種を一粒、二粒つついていた。すぐさまフィービは再びイスの上に立ったが、今度はお金をじつと見つめるだけでは我慢できなかった。彼女が最初この硬貨で作った文字を崩すという無礼を働かず、硬貨で築いた小さな山の一つの頂上から一枚の六ペンスしか取らなかったのは、一つには金額の多さに對する畏敬の念のため、一つには自分が死者の永眠を妨害しているのではないかという至極当然な気持ちのためであった。彼女はその六ペンスを見てかじつてみた。⁽⁹⁾それから下に降りると、炉棚の上でチリーンと鳴らしてみた。間違ひなく本物の六ペンス硬貨だ。彼女が最初に考えたのは、すぐにダッブズ夫人の所へ走って行き、この発見を知らせることだったが、その考えも六ペンスがチリーンと鳴ったことで消え失せ、心の奥にある所有欲が呼び起こされた。なぜダッブズ夫人に教えなければならないのか？ダッブズ夫人は亡くなった老人と血縁関係が全くない——知っているかぎり、他の人たちも同様にないじゃないか。発見された宝物を要求する権利が大家さんにはないことは明らかだ。少なくともフィービにはそう思えた。事実、これは「見つけた物は我が物」⁽¹⁰⁾という格言——かわいそうなフィービがぜひ述べたかった格言——がはつきりと当てはまる事例ではないか。

いや、もはやかわいそうなフィードではない。三回目にイスの上に立つと、見よ、クワイ氏の頭文字「Q」が半分ほど崩れかかっている。それまで浮き出ていた頭文字がたちまち跡形なく消えてしまい、代わりとして下のテーブルに硬貨がしたま積み上げられた。総額どれくらいになるか皆目見当もつかない。フィードは一瞬それを見たあと、突如として恐怖に襲われ、部屋のドアの所まで走って行き、ドアを開けて耳を澄ませた。下宿はひっそりしている。それから彼女は鍵をサッと回して安全を確保し、また戻ってきてお金をじっと見つめた。

「六ペンスと六ペンスで一シリング、プラス半クラウンで三シリング六ペンス、プラス一シリングで四シリング六ペンス、もう一つ半クラウンを加えると――」

こんな計算は無理だ。彼女はすでに混乱していた。

「ピーちゃん、ピーちゃん！」と彼女は叫びながら、計算をやめて小躍りしながらテーブルをぐるぐる回った。「私たち、お金持ちよ、小鳥さん。私たちはお金持ち、お金持ちになったのよ！」

その時、稲妻がピカッと光るように、姉さんについての考えがパッと脳裏に浮かんできた。今年の大晦日、姉さんは雪におおわれた共同墓地の石碑もない墓で眠っている。そのことを考えると、苦悩にみちた哀惜の念で気持ちの乱れは頂点に達し、彼女は突然よよと泣き伏した。心根の優しい娘である。ああ、死んでしまった大切な姉さんが生き返って、この幸運を共有することさえできたら！ 数ヶ月前、かわいそうに死にかけていた姉さんが快適な衣食住を必要とし

ていた——必要としなければならなかった——時に、この幸運が訪れてさえいたなら！ この世では幸運なことが訪れるのはいつも遅すぎる。

しかしながら、本当に一刻も早く硬貨を数える必要がある。とうとうフィービは本腰を入れて仕事に取りかかった。とりあえず、六ペンス、一シリング、半クラウンを別々にして、それぞれの筒に入れてみた。これは役人のドグベリーが言ったように「際適な方法」⁽¹¹⁾に思える。ほーら、終わった。半クラウンが四六枚、一シリングが五三枚、六ペンスが二七枚だ。それはそうだが、合算するといくらになるだろうか？ 実際、これはフィービが時間をかけても答えに近づけず、どうしても解けなかった算数の問題であった。これまでの人生で一ポンド金貨になるまで銀貨を足し算したことなど一度もないのだから。ここに何ポンドもあることは確かなのだが……彼女はじれったさでイライラし、次第に体が熱っぽくなってきた。合計がいくらになるか、どんなことがあっても知らないといけない！ 十シリングずつ塊りにして並べてみてはどうか。そうすれば、その塊りが二つで一ポンドになるじゃないか。彼女は指を震わせながら計算してみた。一つ、二つ、三つ——ちょうど一ポンドの塊りが九つ、一シリングの塊りが一つ、ばら銭の六ペンスが一枚だ。フィービはその六ペンス硬貨にキスをした。

今度は小躍りしながらテーブルを回ることなんかできない。こんな秘密はピーちゃんにだって打ち明けるわけにはいかない。おやおや、ピーちゃんの鳥籠の扉を閉め忘れていた。何を考えていたのだろうか？ 彼女は扉を閉めに立ち上がったが、炉棚の所まで行かないうちに、立

ち上がった目的をすっかり忘れてしまい、またはや立ったまま虚空を見つめていた。

自分の手もとには九ポンド一シリング六ペンスあるという事実がじわりじわり彼女の頭の中で現実味を帯びてきた。このお金をクウイ氏がいかにして所有するに至ったのか——そんなことに彼女が思いをめぐらしたなどと考えるといけない。それは彼女の思考の射程にとうてい入りそうにない問題である。頭脳が乏しいフィービは、この財産を自分が相続したのだと確信するだけでも、大変な苦勞をさせられた。そうだ、物すごい財産だ。彼女のかつての知り合いで、これほどの富を誇ることのできた者がいるだろうか？ 聞かされた話によれば、彼女の父親は酒に溺れる前の若い頃には週に二ポンドも稼ぐことが時にはあったそうだ。それだけで立派な資産家だということだった。とはいえ、今回は大枚九ポンド、しかも全く思いがけず、そして小銭に換金する必要もないのだ！ フィービは幸運な星のめぐりあわせに感謝した。

彼女の沈黙思考がまた始まった。今度は額にシワが寄ることもないし、かじかんだ両手を自分の胸に差し込んでおく必要もない。炬格子の火がかつかと燃えているかのように暖かい感じがする。お金をどうしようか？——これが彼女の考えるべき問題だった。仕事がまた手に入るまで、多分、まだ数週間分の備えをしておかなければならないだろう。だが、九ポンドの中から工面したって、痛くもかゆくもない！ 金銭的な余裕で無限の可能性が生まれるのだ。いろんな希望を抱いて実現させるといふ、今まで夢にも思わなかった機会に手が届くようになったのだ。フィービと同じ階級の女性たちは（大人も子供も）社会に対する不満など感じるこ

ない。たとえ飢え死にしそうになっても、それが辛いと思うことなんてほとんどない。万物の理法においては当然のことなのだ。彼女たちに露命をつなぐだけのものを与えてみよ。それだけで御の字という感情しか浮かばないだろう。裕福な人たちの桃源郷^{（12）}を包んでいる広大な黄金の霽^{もよぎ}の中をのぞいて見たことも無論あるだろう。彼女たちはそうした楽園の話を読むのが好きだし、想像力を大いに働かせることで、そこでの栄華を極めた生活をぼんやりと思い浮かべたがるだろう。しかし、そこに至る道が自分たちには閉ざされていることをよく知っているのだ、そうした夢の国と自分自身の実際の現実生活との違いで心を乱すことなど決してないのである。それに、フィービは同類の女の子たちと違って、ぜいたく品について想像することなんかほとんどなかった。彼女はホクストンから出ること自体めったになかったため、ウェスト・エンド^{（13）}の街路さえ知らないのだ。毎日の仕事で場末の通りにある薄汚い小さな部屋にこもっているのだ、一緒に手伝って作っている造花も組み立てられた形で見たことはほとんどなかった。そうした飾りを購入するお金のある人たちの頭や服に付いているのを見たことはそれ以上になかった。容易に想像できることだが、彼女は自分が何をほしいと思っているのか、それさえはつきりと分かっているのだ。お金を発見したことで興奮していた彼女には、全世界が今では自分に服従しているように思えた。そんな状況下で好きなものだけを選ばなければならな

いとしたら、どんなに冷静な人でも当惑してしまうだろう。

もちろん最初に考えるべきは、服——それも冬用の暖かい服だ。鮮やかな色はダメ、そう、

亡くなった姉さんのために喪服のようなものさえ着る金銭の余裕がなかったのだから。喪中だから服の色の選択も限られる。その代わり頭の天辺からつま先まで新装を凝らすことにしよう。このことだけは最後にはつきり決まった。彼女はいくつかの店の陳列窓で観察していたあの形状の帽子のことを少しずつ思い出した。特に気に入ったジャケットのことも知らないうちに記憶にしっかりと残っていた。それから——食事、ああ、ホントに美味しい食事だ——手始めにほんの少しピリツとした塩味の料理、そのあとは甘さがはつきり出たデザートにしよう。そして、一日は買い物と店の冷やかし、一日は御馳走の食べ歩きがしたい！ 食事という点でピーちゃんの間が限られているのは残念至極——ミンスパイさえ食べられないとは、さぞかし辛かろう。新年のプレゼントを買ってあげる人はいないだろうか？ そうだ、いつもひどい咳をしているロティー・シンプソンがいる。友情のようなものを共有している唯一の女の子——残念ながら、景気が悪くなつて奉公に出てからは、付き合いが途絶えてしまっている。何か買ってあげよう！ レティーの母さんに届ければ、奉公先へ送ってくれるはずだ。これが一日仕事になるなんてことはまさかあるまい。しかしながら、別の考えがゆつくりと、おそろおそろ首をもたげてきた。劇場のことを忘れていた。近くのブリタニア劇場⁽¹⁴⁾ではパントマイムをやっている。劇場の周囲の壁は想像を絶する荘厳さを謳った広告で、それはもう華々しいかぎりだ。勇気を出して行ってみようか？ 姉さんもいたら気に入るかな？ いやいや、決心がつかない。やっぱり待って、次の夜の催しがいつか確かめてみよう。

一体全体、今は何時だろうか？ 通りは水を打ったように静かだ。ほら、教会の鐘が今にも鳴りそう。すぐに鳴りだして時刻を報じるぞ。えっ、一時じゃないか！ 時刻の遅さに気が動転し、フィービは数秒で着替えてベッドに跳び込んだ。

* * * *

きらびやかで美しい夢を運んで押し寄せた波も、フィービの朝の目覚めとともに静まっていたが、夢とは違って希望をもたらず物を現実世界に残して行ってくれた。彼女はハッとして目覚めると、すぐにテーブルの上の銀貨の山を探し、それを湯水のように触ってから、氷のはった水で両手を洗った。他の人に聞こえるかもしれないという恐怖のため、お金の音を響かせて新年を祝うことはできなかった。彼女は着替えをしながら、今日は凍るほど寒い、晴れた朝になりそうだったので嬉しかった。どんどん歩き回りたい時に、雨や雪になると腹が立つものだ。昨晩はぐっすりと長く眠っていたに違いない。今朝は世の中が活気づいており、「さあ、大いに楽しくやってくれ」と呼びかけているような気がする。彼女は興奮しすぎて、あまり朝食に食欲をそそられなかった。戸棚に残っていたパンの切れ端で今のところは十分だったのだ、彼女は髪を解きながら食べつつ、一緒に紅茶カップで水を少し飲んだ。昼食時にお腹が減っていればよいのだ。数分ほどで外出の準備ができたが、お金をどこに置いておくべきかとい

う新たな問題が生じた。できれば一緒に持つて行きたかったが、それはできない話で、そんなことをすれば、重苦しい感じがすることだろう。ほんの一瞬、もとあつた戸棚の天辺に戻そうかと考えたが、それは長い間そこに何事もなく置かれていたからである。しかしながら、そうする勇気が出なかった。隠し場所は一つしかない。手洗い用の洗面器が上に置いてある彼女の箱だ。ちゃんとした錠つきで、中には彼女が大切にしているもの全部——特に姉さんの安っぽい形見——が収められている。そこであれば、お金を隠しておいても安全だ。今日はどれだけ持つて行けばよいだろうか？ この問題は彼女のみすばらしい小さな財布の収容能力で簡単に片がついた。大銭と小銭で一ポンドをかなり超えた金額が入った財布は、かつてこれほど膨張して見えたことはない。これだけあればスタートとしては十分だ。この金額を昼食時までに使いつつたなら、午後にもつと取りに戻ればよい。午後には部屋代も払わねばならない。ダッブズ夫人はきつと腰を抜かすだろう。フィービがこれから見せようと思つてゐる素晴らしい身なりにはさらに驚くはずだ。いろいろ考えると、おそらく、別の下宿へ引越す方が賢明かもしれない。まあいい、じっくり考えてみよう。

フィービは注意しながら箱に錠をおろし、下宿屋のある袋小路から出てホクストンの本通りへ向かった。そこでいくつかの店の陳列窓をながめ始めた。しかし、自分が持つてゐる豊かな財産に慣れてくると、少しずつ大胆になってきた。造花のすべてが作業部屋から送られるシェーイまでは歩いて行ける距離だ。その混雑した騒々しい通りには、このホクストンなど遠く

及ばない大きな店がたくさんあり、お金がふんだんに使えて最高のものを求めている人なら、誰もがそこに足を運んでいる。フィービは今その特権階級に属しているのだ。彼女はしばらく自分の貧乏くさい外見のことを忘れていた。お金がしこたま入っているので防犯のために手でしっかりと握っている財布のことだけを考えればよかった。財布を握った感触で体が全身ぽかぽかしている。そんな気持ちで何度も寄り道しながら進んで行き、やがてショアディッチ⁽¹⁵⁾に入り、そこから偶然チープサイド⁽¹⁶⁾に来てしまった。ここでは見るものが多すぎて、全く足が前に進まない。宝石店は魔法のように彼女の注意を引きつけた。それぞれの宝石の値段が分かってさえいたら！彼女は首飾りに付けるロケットがとてもほしかった。これがあれば、家の箱に一ふさ収めている姉さんの髪の毛を少し入れられる。こちらにあるレディー用の腕時計はいくらするのだろうか？とても小さいから、大した値段ではあるまい。おや、腕時計の一つに値札が付いている。それを見て彼女はハッとさせられた。でも、これは金時計じゃないか。もっと安い銀製のものもあるぞ。お次はブレスレットだ。ロティー・シンブソンはプレゼントとして気に入ってくれるだろうか？

とはいえ、こんなことをしてはダメだ。もう十一時半、おまけに明らかに空腹を覚えてきた。ということは、結局のところ、宝飾品がほしいわけじゃないのだ。途中で店の陳列窓に手袋や光かがやいて彩りあざやかなシルク製品がいっぱい彼女の目を引いた。こちらの方が目的になっっている。あの手袋の美しいこと！裏地もついている。一組でたったの三シリング

六ペンス。これなら全く分相応だが、店に入ったあとのことを考えると、彼女は自分の卑しい身なりが頭から離れなかった。ドアの所でのぞいていると、ちょうどレディーの客が出てきたので、フィードは顔を赤らめて、そのまま足早に通り返した。どこでもそんな調子だ。大きな菓子屋の前ではまたもや空腹を覚えた。まあ、美味そうなものがきちんと並べられていること！ 見ただけで想像力が働かなくなってしまう。お腹が減った。ぺこぺこだが、あそこのカウンターまで行つて、その後ろにいる垢ぬけた若い店員に話しかけるなんて、そんなことはとてもできない。彼女はそのまま通過すると、バスケットを持って売っている男から菓子パンとタルトを買いたいという強い誘惑にかられた。しかしながら、そんなことをするのは墮落のように入る。やがて彼女はセントポール・チャーチヤード⁽¹⁷⁾にやって来て、そこでマントや毛皮や婦人帽やリボンを見て、またもや注意を奪われた。しかし、またしてもあちこちに付けられた値札に恐れをなし、いずれにせよ自分は店に入る勇氣が出ないだろうと思つた。フィードは自分が完全に勘違いしていたことを悟り始めた。彼女の心は、こんなにビクビクせずにはボクストンの、もつと安い店へ舞い戻つていた。前の晩に考えていた帽子やジャケットのことがまた思い出された。慣れ親しんだ通りへ行つた方がよいのではあるまいか？

あまりにも時間をかけて見入つたり、驚嘆したり、ほしいなと思つたりしていたので、午前の時間はほとんどなくなつてしまつた。彼女はその場をしぶしぶ離れ、もと来た道を戻りだした。とはいえ、疲れていたし、腹ぺこだった。しばらくすると、バスケットを持った男にまた

会ったが、今度は自制心が働かず菓子パンを買ってしまい、とことこ歩きながら食べた。ただ、それでかえって空腹を感じるようになった。そして、ある幻影が彼女の心に浮かんて次第に鮮明になってきた。それは陳列窓に大きな冷えたプラム・プディング⁽¹⁸⁾が飾ってある——少なくとも昨日は飾ってあった——地元の通りにある例の小さな料理店の幻影である。あそこなら豚肉と野菜の料理が六ペンスで買えるぞ。この時刻であれば湯気が窓を曇らせながら渦を巻いて店先から立ち昇っているだろう。その香りさえするような気がした。戻ろう、すぐにホクストンへ戻ろう！ でも、お金持ちなのだから、ずっと歩いて行く必要なんかないじゃないか！ この銀行⁽¹⁹⁾のそばを通る乗合馬車を利用すれば、自宅の近くまで行ける。というわけで、彼女は乗車して疲れた手足を嬉しそうに休ませた。

例の汚い小さな豚肉料理店にやって来たフィービは、赤茶けた汁に浸っている非常に薄い口ースト・ビーフ、凍傷にかかったようなポテトが二つ、継ぎを当てたような筋つばいカブの若葉、最後に脂肪^{スエツト}たつぶりの冷えたプラム・プディングからなる昼食をとった。だが、この昼食で満たされた気持ちにはなれず、楽しみに思っていた御馳走と比較すると、みじめさが増して自分自身にひどく腹が立った。まあ、仕方ない。ミンスパイと干しブドウのケーキと一緒に美味しいティーをいただけばよい。どこの店がよいかは分かっている。しかしながら、にわかには屋根裏部屋のお金のことが心配になってきた。箱にちゃんと入っているかどうかを確認しに、走って戻らないといけない。彼女は部屋に着くと、すべて部屋を出た時のままだったので

胸をなでおろしたが、くたくたに疲れていたので、ベッドに腰かけて休みながら、いろいろなことを考えた。

ロティー・シンプソンがまだ里帰りしていないとは残念だ。ロティーなら例の秘密を打ち明けられただろうし、友だちのアドバイスは非常に貴重である。ロティーには何を買ってあげようか？ それについては母親のシンプソン夫人に意見を求めてみたらどうだろうか？ 何も説明する必要はあるまい。実際、フィービはシンプソン夫人を打ち明け話のできるような女性だと思っていなかったが、いずれにせよ母親であれば、娘が必要としているかぐらいいは、それとなく教えてくれるだろう。フィービはぜひそうしようと思い、今度は財布をちゃんとポケットに入れ、シンプソン夫人の住まいへと向かった。それはフィービの下宿のある袋小路とよく似た場所にあったが、シンプソン夫人は屋根裏部屋ではなく、地下の炊事場のような部屋を賃借りしていた。窓の張り紙を見ると、ここで洗濯とシワ伸ばしが行われているのが分かる。入口のドアは開けっ放されていたが、この地域では普通のことだ。フィービは地下の階段を真つすぐ降りて行き、階段下の暗い所に立ってノックすると、「どうぞ」と言われた。初めのうちは、炬格子の中で赤々と燃えている火を除いて何も見えなかった。地下室には蒸気が充満している。この蒸気は洗濯したばかりの大量の服から出ているようで、服は乾燥させるために壁から壁に渡したロープにかかっていた。しかしながら、この部屋をフィービは知りつくしていた。一方の端にはベッドが一つ、昼間に使う必要のある家具が数点、そしてシワ伸ばし機⁽²⁰⁾も

一台ある。ここに住んでいるのはシンプソン夫人と末の娘で、ロティーも奉公に出る前に二人と一緒にここで生活していた。

「誰なの？」と、この洗濯女がかん高い声で叫んだ。「まあ、あんたなの、フィービ？　すぐドアを閉めてちょうだい。蒸気が二階に上ると、他の下宿人たちがいやがるからね」

「シンプソンさん、ロティーの具合はどう？」と、フィービは濡れた服と服の間から顔をひよいと出して尋ねた。

「あの子の具合が悪くなることはもう金輪際ないよ」というのが返事だった。悲しそうだが、もはや運命とあきらめたような声である。

フィービは理解できないといったような顔で、立ったまま相手の顔を見つめていた。

「火曜日に戻ってきたのさ、どうしようもない状態でね。奥様の話じゃあ、仕事ができんようになったもんで、もう置いといてもムダっちゅうわけだ。薬局でクスリを少し買ってやったんじゃが、何の効き目もなかったよ。先おととい、いきなり咳こみ始めたそうで、あの子の所に着く前に逝っちまったよ。見ていくかい？」

「ダメ、ダメよ！　できないわ、シンプソンさん！」と、フィービはあまりの恐怖に尻込みしながら答えた。それから声を出して泣き始め、すすり泣くあまり恐怖を忘れてしまったほどだ。シンプソン夫人はほとんど何も言わなかったが、死神を破壊者ではなく、むしろ救済者と見なしていた母親を責めることなどできようか？　ともかく、彼女には本腰を入れてやらねば

ならない一日の仕事があつたので、無益な喪に服している時間などはないのである。フィービはその場に数分しかいなかった。死体に対して恐怖を覚え、おそろおそろ地下室を出る時は、ベッドの方角から目をそらしていた。

* * * *

フィービは悲しい気持ちで再び家路を急いだ。ショックを受けて事の重大さを認識した彼女は、すぐ買い物に出かける気になれなかった。買い物はティーのあとまで延期すればよい。フィービは甘い物を買って満喫することを期待していたが、それはもうできないと思った。友だちが死んで横たわっている部屋から出てきたばかりなのに、浮かれ騒ぐのは怪しからんことである。それで、質素なものをいくつか——パンとバターと紅茶を少し——買って、屋根裏部屋に持つて上がった。それから、自分で何とか調達するまで必要な燃料の前借りと部屋代の支払いという二つの目的で、同じ家の下の階にいるダップズ夫人の所へ行った。ダップズ夫人から驚きと好奇心に満ちた目を向けられると、フィービは落ち着きを失ってそわそわしたが、何とかやって行くためのお金が少し手に入つたと説明し、この大家さんから借りた薪まきと石炭をバケツに入れて早々に退散した。そして火を起こし、てきぱきと紅茶をいれた。その頃までには彼女も日頃の自分にほとんど戻っていて、温かくて甘い紅茶の入ったカップをひざに置き、両足

を炉格子の上にのせたが、だんだん快適な気分になるにつれ、ミンスパイがほんの一つか二つあればなあと思つた。すぐに買つてくることはできる。だが、フィービはその誘惑に屈せず、良心に従つてバターを塗つたパンだけで我慢し、かわいそうなロティーのことを思い出して敬慕の情を寄せた。彼女が普段より少し多めにバターをパンに塗つたのは事実だが、我々は誰であらうと人間性を求めすぎるべきではない。

ティーがすむと、フィービは部屋のドアを慎重に閉め、箱から例のお金を取りだした。それからテーブルの上に広げると、子供が積み木で遊ぶように、硬貨で山を作ったり、四角や円の形で積んだりした。さらに、お金を数え直して、自分がいない間に誰も触れていないことを確かめた。気持ちに明るさが戻つてくると、何を買おうかなという考えもまた浮かんできた。その時、彼女が心の落ち着きを取り戻すための手助けとなるかのように、どこか近くの通りから手回しオルガンの陽気な演奏が突如として聞こえだし、子供たちが路上で跳ねまわろうと一緒に下宿屋のある袋小路から飛び出して行く音も聞こえた。すでに日が暮れており、フィービは光きらめく店のことを考えると居ても立つてもいられなかった。それで、彼女はまた出かけたのだが、今度はホクストン・ストリートまでしか行かなかつた。この街路には種々雑多な店があり、楽しくなる店もいっぱいある。いろんな値段の品物があつたので、彼女はぶらつきながら店の陳列窓を順番に見ているうちに、これまでと同じように何にするか決められなくなつた。やつつのことで、こちらかあちらの品物にすることに決まりかかつたが、いざ店に入ろう

とすると、もう一軒だけ別の店を見て、先に決めたものを後悔したりしないか確かめた方がよいように思えてきた。

そうこうしているうちにブリタニア劇場の出入り口にやって来た。その時には扉もすでに開いていて、多くの人たちが押すな押すなの勢いで中に入ろうと興奮していた。フィービは生まれてこの方パントマイムなど見たことがなかったので、群衆の光景に目を奪われた。自分も入ろうと決心したが、どのくらい払えばよいのか分からなかった。誰か尋ねることができそうな人を見つげようと周囲を見渡したところ、自分と同じ年恰好の少女が歩道の端っこに立って、みすばらしいアルスター外套⁽²¹⁾のポケットに両手を突っこみ、うらやましそうな視線を群衆に投げかけているのに気づいた。フィービは彼女に近づき、少し恥ずかしそうな態度で必要な情報求めた。少女はかなり美しい顔をしていたが、腹を空かせている様子で、ぶるぶる震えながら教えてくれた。財布を片手に握っていたフィービは、少女から顔をそらして一階席^{ピット}の料金六ペンスをとろうとしたが、ちょうどその際に場所取りで急いでいた二人の荒くれ小僧が彼女にぶつかって来たので、財布から硬貨が何枚か飛び出してしまった。運よく、そこは照明のよい場所だったし、お金もそれほど転がっては行かなかった。今しがたフィービに話しかけられた少女がサツと一緒に拾ってくれたので、すべて無事に回収できた。

「まあ驚いた！ あんたぐらいお金持ちだといいいんだけど」と、見知らぬ少女は優しい笑みを浮かべて言ったが、身を切るような突風がピューッと通りを吹き抜けたので、再びぶるぶる

と震えた。

「あんたも一緒に入る？」とフィービは尋ねたが、この矛盾した質問は一つには彼女がお金のことを話したくないために、一つには落ち着きを取り戻していたとはいえ先ほど体験した恐怖のために出たものだった。

相手は突っぱねるように首を横に振った。

「お金なら払ってあげるわよ」とフィービは言ったが、実を言うと、ひとりで楽しむのに寂しさを感じていて、話し相手ができるならば大歓迎だったのである。

「できれば何か食べ物を買うお金をもらいたいわ」と答えた少女は、先ほどこらずと非常に鋭い視線でフィービの顔を見つめていた。

「お腹が減ってるの？」

「きのうの晩から全然！」

少女は歯を見せて笑った。申し分のない歯並びで、ちょうどその時は彼女の食欲がそこにはつきり見てとれた。

「一緒に行きましょう。また一緒に戻ってくればいいから。ただ、遅くなっちゃうわね」

「そんなこと、気にしなくていいわよ、全然！」と、少女はパツチリした目を輝かせながら大きな声で言った。「最初から最後までずっと同じなんだから、どこから見たって、いつも一緒よ」

フィービは實際そのとおりだと思つて納得し、新しい仲間と一緒にその場を立ち去つた。少女は自分の好みに従つて少し離れた通りの屋台で欧州貝^{ウエルク}を食べようと提案した。フィービは喜んで同意したものの、これが本当に丸二日も食事をしていない人間にとつて最良の料理であるかどうか考えもしなかった。二人は酢や胡椒^{ヒュー}を振りかけながら殻つきの珍味をしこたま食べた。そうした状況では当然ながら親交が深まるものである。少女が自分から提供してくれた情報によれば、名前はジェニー・エヴァンズといい、仕事はたまたまフィービと同じ造花作りで、しかも失業中であることが分かった。フィービは、相手が自分の懷具合に興味津々の様子だったので、お金に関しては話しすぎないようにし、ダブズ夫人に対してでつちあげたのと同じ漠然とした説明をした。

彼女たちは劇場に戻つた。フィービが二人分とも払つてやつたのだが、中に入つてすぐ彼女たちに立ちはだかつたのは氣がめいるような眺めだった。というか、眺めと言えりようなものでは全然なかつた。一階席は壁までごつた返していたのだ。立見席しか残つていなかったが、いざ見ようとする、それにはまた別の問題があつた。舞台前の楽団が演奏を始めていたが、数分後に観客の間に興奮した動きがあつたので、開幕したらしいことが分かつた。押し合いへし合いしながらも、フィービはなんとか豪華絢爛たる舞台をチラツと見ることができた。だが、かえつてタンタロス⁽²³⁾の苦しみを味わい、じれつたさで叫びたくなつた。

「だから、遅くなりすぎるって言つたでしょ」と、フィービは相手の少女を責めるように

叫んで言った。

しかしながら、ジェニーはどこ吹く風と聞き流しているように見えた。

「どうでもいいじゃないの、そんなこと！ あした来ればいいわ。出ましようよ。目まいがするわ」

フィービは目に涙を浮かべそうになって、彼女のあとに続いて雑踏の中から出た。二人は黙ったまま通りに沿ってゆつくりと歩いていたが、とある居酒屋の前でジェニーが立ち止まった。

「あんなあとだから、何か温かいものをちよつと飲めば気分がよくなるわよ。ちよつと立ち寄ってかない？」

フィービは欧州貝の御馳走で喉がからからだったので、その提案に心を引かれた。居酒屋のような場所は避けるべきだと姉さんからいつも教えられていたため、自分から衝動的に入るようなことは決してなかったが、この時は劇場の熱気のアトで寒気がしていたし、居酒屋の中はとても快適そうに見えた。彼女はさすがに店内に導かれると、すぐにジェニーが「何か温かいもの」とやらのレモンの小さな切れ端を浮かべたグラスを二つ手に入れた。最初の一口はありがたかった。だが、フィービは二口目で首を横に振り、グラスを空にするのに苦労した。二人は壁のそばのベンチに座っていたが、ジェニーも打ち解けて雑談に応じてきた。フィービはこんな楽しい友だちに会えて嬉しくなり、数分後には何の遠慮もなく話したい気になっ

ていた。それで、ちよつとした幸運が自分に訪れたことを遠まわしに話し、自分がほしいと思つて実際に買うつもりでいる品物についても語り始めた。二人が再び通りに出た頃には、フィードは今日の朝一番からその時までで最高の気分になっていた。それで、彼女は最初にやつて来た店に入つて、その陳列窓で見た帽子を買う氣になったのだが、ジェニーが苦勞して彼女をなんとか思いとどまらせた。

「今晚、わたし、どこで寝ればいいかしら？」と、ジェニーが藪から棒に尋ねてきた。「大家さんに追い出されちゃつたの。三週間もためこんじゃつたからね」

すぐにフィードが「一緒にうちに来ればいいわ」と言つたので、その申し出は喜んで受け入れられた。今や物事の指示については、実質、ジェニーの思いのままである。彼女の考えに従つて、夕食用に何か料理を買いこみ、そのまま帰宅しようということになった。フィードとしては買い物翌日まで延ばすのはいやだったが、例の裏通りの角にある豚肉料理店まで来ると、何度も何度も店に入ろうとして勇氣が出なかつた昨夜の夕食のことが思い出されて、食事以外のことがもう考えられなくなつた。一ポンドの豚肉の煮込み料理、二ペニー分の豆粒プディング、湯氣が立っている一ペニー分のニンジン、これらをまとめて新聞紙に包んでもらつた。ついに自分の財産を使う時が来たのだとフィードは思つた。

「でも、やっぱり何か飲み物が必要ね」と、二人がやつと屋根裏部屋に着くと、ジェニーが言つた。「少しお金をちょうだい。わたしが買ってくるから、その間に火を起こしといてね」

「ちゃんと戻ってこれるかしら？」と、フィービは嬉しそうに笑いながら尋ね、大量の肉と野菜の料理を新聞紙から取りだして皿に移した。

「心配ないわよ！」と相手は答え、一シリングを持って走り去った。

ジェニーが戻ってきた時には、やかんの下で暖炉の火がパチパチと音を立てていた。彼女が手に持っていたのは茶色い液体の入ったビンだった。

「まあ、さっき飲んだのと同じラム酒⁽²⁴⁾じゃないの！」と、フィービはコルクの栓を抜いて、その香りをかきながら大きな声で言った。

「こっちの方がいいでしょ？ 砂糖はあるの？ いい人ね、フィービ、あんたって——あら、壁に書いてあるあれは何なの？ あんたのイタズラ書きか何か？」

フィービと一緒にテーブルに着席してから説明してやったが、笑いすぎてうまく話すことができなかった。何を話しても笑いの種になるように思えた。ジェニーが混ぜて作ってくれた酒をちびちび飲んだが、飲むたびにだんだん打ち解けて相手への信頼も増した。とうとうフィービは相手の顔にくつつくほど自分の顔を近づけ——とても大きなパツチリした目で、柔和な頬を紅潮させているジェニーはそれほど美しい——そして秘密を守れるかどうか尋ねた。ジェニーは絶対を守れると答え、フィービとほとんど同じくらい目を大きく見開いて、クワイ氏の遺産に関する話を聞き逃さないように耳を傾けていた。彼女が「お願い、お願い、ほんの少しでもいいから、箱の中を見せてちょうだい」と言ったので、二人で一緒にひざまずき、ふたの

下をのぞいた。すぐさまフィービは箱にもう一度しっかりと錠をおろし、勝ち誇ったような笑い声をあげながら鍵をポケットに戻した。

そのあと即座にフィービの目の前の状況がぼんやりし始めた。彼女はまだ話したり笑ったりしていたが、それは次第に断続的になり、しゃべっている内容がはつきりとは分からなくなっていた。暖炉の火がとても熱くなったような感じがし、疲れもあつて手足がズキズキと痛んだ。確かに、一日中ずっと歩きまわっていたから、疲労困憊していたとしても当然である。まぶたがくつつくように重く、時々どうしようもないほど眠くなり、前のめりになってイスから落ちそうになった。しかしながら、二つのことだけははつきりと意識していた。一つは早くベッドに入って眠りたい、もう一つはジェニーに話した秘密はとてつもなく重要だということを前もって心に留めさせ、決して裏切ったりしないと約束させておきたかった。ジェニーはすべて大丈夫だと答えた。彼女もまた「そろそろ寝る時間だ」という意見であつたが、ただその前にちよつと暖炉で足を温めたいと言つた。フィービは頭を枕の上で横向きにしたまま、ジェニーがそうするのを見ていたが、そのうちに相手の姿が暖炉の火の真つ赤な輝きの中で漠然とした形のない大きな継ぎはぎのように見えだし、それからすべてが闇に包まれてしまった。

翌朝、フィービが夜明けの光を目で感じた時、その感覚は自分に災難が降りかかったとおぼろげな意識、まぶたを開けることができないほどの鈍痛、意識するにつれて大きくなる心臓の不規則な鼓動などと交錯していた。彼女は必死になつて記憶をたどろうとし、心身ともに

最大限の努力をして、ようやく体を起こして部屋を見まわすことができた。最初は壁に書かれたクウィ氏の名前が目に入り、次はそれにまつわる話のすべてが思い出された。

「ジェニーー！」

フィービはハツとして彼女の名前を発したが、それに応じてくれる者はいなかった。彼女はベッドから床の上に飛び降りたが、ひどい目まいに襲われたので、立ち上がる前にしばらく両手で頭を支えておかねばならなかった。屋根裏部屋には他に誰もいない。ジェニーのいる気配はどこにもない。ただ、テーブルの上にある皿とグラスが、すべてが騒然とした夢だったわけでないことを示している。しかし、彼女の箱は！なぜ、手洗い用の洗面器が下の床に置かれ、ふたが外れているのか？ひとつ跳びで箱のそばにひざまずき、探しても見つからないもののために、中に入っていた他のつまらないものを気が狂ったように投げ捨てた。彼女のお金は——光かがやく半クラウン銀貨や一シリング銀貨や六ペンス銅貨は——全部どこに行ってしまったのか？それにジェニーは一体どこにいるのか？

どんよりした朝だった。薄い雪片が狭い路地裏に降りこんでいて、身を切るように寒かった。かわいそうなフィービ！

【訳注】

- (1) より美しい声でさえずる鳥を得るためにヴィクトリア朝では交雑による品種改良が盛んに行われた。カナリアとアトリ科の鳥（特にヒワ）との交配種は雑種カナリア (mule canary) と呼ばれる。
- (2) 当時の救貧院 (workhouse) の収容者の境遇は最下級の労働者のそれを下回るように規定されていたので、そこに行くのがいやな労働者はどんな低賃金でも我慢して働く必要があった。
- (3) 「意志のあるところ道あり (Where there's a will, there's a way)」。
- (4) ロンドン中心部の北に位置するハックニー (Hackney) 自治区の一地域で、当時は娯楽とレクリエーション（特にミュージック・ホール）で有名だったが、多くのスラム街を抱えるロンドンの最悪地域の一つでもあった。
- (5) 「高すぎた代価」の訳注(1)を参照のこと。
- (6) 英国の二シリング六ペンスの硬貨。一九四六年までは銀貨で、それ以降は白銅貨。一九七〇年廃止。
- (7) 質屋が抵当物に対して出す質札のこと。伝統的に英国の質屋の看板は三つの金色の玉で、当時の質札のカードは黄色だった。
- (8) 英国の小銅貨で四分の一ペニー。一九六一年廃止。
- (9) 純金は硬度が弱いので、かむと歯型の凹み痕がつくが、偽金の場合は金・銀・銅の箔^{はく}がはがれ、そ

の下に硬い地金が見える。ここは六ペンス銅貨なので、単にフィービが偽金チェックの習慣を真似ただけだろう。

(10) 初出はイギリスの探検家スピーク (John Hanning Speke, 1827-64) の『ナイル河水源の発見』(*The Discovery of the Source of the Nile*, 1863) の第五章 (Findings are keepings by the laws of our country) 』。

(11) ドグベリー (Dogberry) はシェイクスピアの『空騒ぎ』(*Much Ado about Nothing*, 1598) に登場する無学で鈍感な警官で、「最適な方法 (the aptest way)」を「際適な方法 (the effest way)」(四幕二場) と言いつつ間違える。

(12) エーリュシオン (Elysium) はギリシャ神話で英雄・善人が死後に住む極楽。

(13) ロンドンのシティーの西側で、ハイド・パークまでの高級住宅・商業地区。特にピカデリーを中心として劇場、レストラン、大商店などで名高い。

(14) シェイクスピアの通ったエリザベス朝風の居酒屋の跡地に一八四一年に建てられた娯楽施設 (Royal Britannia Saloon and Britannia Tavern) が一八五〇年に改修されて完成した劇場。八年後には三千人収容の施設となり、シェイクスピア、ヴィクトリア朝のメロドラマや喜劇、そして冬のシーズンにはパントマイムが演じられていた。

(15) ショアディッチ (Shoreditch) はロンドン中北部の旧首都自治区の一つで、現在はロンドン自治区ハックニーの一部。当時はウェスト・エンドに対抗して労働者階級にとっての娯楽の中心地で、多くの劇

場やミュージック・ホールを擁していた。

(16) チープサイド (Cheapside) はシティーの一街区。中世には市場だった所で、十九世紀にはロンドン随一の商店街であった。

(17) かつてはセントポール大聖堂の境内であったが、宗教改革後は商店（特に出版社や書店）などに売却されて道路となった。

(18) 干しブドウ・スグリ・シトロン・スエット・香辛料などを入れた味の濃いプディングで、特にクリスマスに食べる。

(19) 一六九四年に設立されたイングランド銀行のことで、正面入口はスレッドニードル・ストリートにある。

(20) 二本の熱したローラーの間を通してシートや布などのシワを伸ばす機械 (mangle)。

(21) 両前仕立てで、通例、ベルト付きの防寒用の長いコートで、フード付きもある。もとはアルスター (アイルランドの旧州) 産の粗紡毛織物で作った。

(22) 全長約八センチの大きな巻貝の総称 (whelk)。

(23) ギリシャ神話のタンタロス (Tantalus) は息子を殺して料理し、神々に供した罪で冥府の下にあるタルタロス (Tartaros) につながれたが、ここで顎^{あご}までつかっている水を飲もうとすると水は引き、頭上の果実を取ろうとすると遠のいた。

(24) 西インド諸島が原産地と考えられているサトウキビや糖蜜の発酵液を蒸留して作った酒。ヴィクトリア朝ではパンチ（酒・果汁・砂糖・香料などを混合して作る飲み物）のベースとしてよく使われた。